「未知との出会い」
2-A 静岡文化芸術大学　伊藤ジャスミン理子

北京に降り立った瞬間、まず目に飛び込んできたのは、想像していたよりもずっと近代的な街並みだった。確かに空気が澄んでいるとは言えないが、東京と比べても大きな差は感じない。異国でありながらも、どこか親近感を感じる旅の始まりであった。

中国人の友人を持ち、幼い頃から中国に興味を持ち続けていた私は、自身が中国に対して特に悪印象を持っていないと思っていた。しかし、旅をする中で湧き上がる感想には、「思ったより清潔」、「思ったより静か」など、“思ったより”という言葉が頻繁に頭に浮かんだ。無意識のうちに抱いていた中国のイメージが鮮明になり、どこか上から目線で見ていた自分に驚いた。

旅の中盤、蘇州の日本人学校バス襲撃事件を知って、薄れていた偏見や不安が一気に戻ってくる感覚があった。しかし、北京外国語大学や西安外国語大学の学生と交流で、不安は徐々に溶けていった。私たちを温かく迎え入れ、日本のアニメや音楽、流行など、私たちとの会話に熱意を注いでくれた。それと同時に、語学力の差が歴然で悔しさも感じた。私は大学で２年間、中国語を勉強してきたが、彼らの前で中国語を話すのが気後れするほど、彼らの日本語は流暢であったからだ。

メディアで報道される情報は、全体の一部に過ぎない。歴史的背景から、日本に対して否定的な感情を持つ中国人がいることは事実だろう。しかし、それと同時に、日本に対して友好的な人々も、決して少なくないことに気がついた。事件に関しても、いい人もいれば悪い人もいるのは世界共通のことだ。悪い人が目立ってしまうのは、人口の多い中国であるからこそであり、その分いい人はもっと多いのだと知ることができた。
また、中国に対してそれぞれが想いを持つ日本人と交流することができたことも、私にとってかけがえのない経験となった。普段の大学生活では、同じ学部学科の、良くも悪くも、似たような価値観を持つ人としか関わることができない。そのため、異なるバックグラウンドを持ち、多様な分野に精通した訪中団メンバーは、私にとって新鮮であった。訪中団メンバーとの対話は、自分の価値観を客観的に見つめ直し、新たな視点を獲得するきっかけとなった。

私が訪中団に参加した目的は、「自分の肌で中国を感じ、現地のリアルを知る」ことであった。その点で考えると、今回の訪中はその目的を十分に達成することはできなかったと感じる。なぜなら、私たちは客人としてもてなされ、ホテルやレストラン、交流先の大学からほとんど出ることがなかったからだ。交流した中国の学生や友好団体の方々もまた、日本に対して関心を持ついわゆる親日家であり、そういった意味では、真の“現地”に触れることができていない。私はまだ、自身の奥深くにあった中国へのイメージや不安について整理がついていない。この問題については、今後、個人的な訪問を通して解消していきたいと考えている。この訪中は、中国への理解を深めるだけでなく、未知なる自分を知り、中国について

さらに関心を湧き立てられるような、そんな旅であった。

「13 億の人々と歴史が織りなす「中国」を探す旅」
2-A お茶の水女子大学　岡本克美

7 日間の旅を経て、訪問前の中国に対する印象は非常に表層的なものであったことに気付いた。中国は 13 億人以上の人口を持つ広大な国で、その多様性は非常に豊かだ。「中国人」と一括りにしてしまいがちだが、実際には多様な民族、文化、そして価値観が存在する。例えば、中国には 56 の民族が存在し、それぞれが独自の文化と伝統を持っている。また、都市部と農村部、東部と西部では経済発展の度合いや生活様式も大きく異なる。

今回訪れた都市部では近代的な建築物や進んだ技術システムが目立った。北京や上海などの大都市では、超高層ビルや最新のインフラが整備され、都市の景観は非常に近代的だ。また、スマートフォンやインターネットを利用したサービスも発達しており、日常生活における便利さは非常に高い。

しかし、その一方で経済格差が顕著だ。例えば、真夜中でも非常に安価な料金で食事の配達サービスが利用可能だ。配達員は時間との戦いの中でスピードを求められ、わずかな収入を得るために働いている。彼らは多くの場合、農村部から都市部に出稼ぎに来た労働者であり、過酷な労働条件の下で働いている。このようなサービスは、外出する代わりに数百円を支払う余裕のある富裕層と、数百円のために真夜中でも働く貧困層の存在によって成り立っているといえる。

このような状況を目の当たりにして、日本で出会う中国出身の方々がいかに恵まれた環境にあるかを改めて実感した。日本にいる中国出身者の多くは、教育や職業などで成功を収めた人々であり、訪中して見た現実とは大きく異なる環境にいることを感じた。

北京外国語大学の学生との交流を通じて、中国の教育が非常に競争の激しいものであることを知った。中国の学生たちは幼少期から良い学校に入るために厳しい受験競争を経験する。例えば、小学校から中学校、高校、大学に至るまで、各段階での入試があり、これに合格するために多くの時間とエネルギーを費やす。勉強に集中するために部活動や趣味に時間を割く余裕がない学生も多いという。

また、大学進学に際しても、多くの学生が地元の大学に進むのではなく、寮生活を前提にした遠方の大学を目指す。これにより、学費や生活費を節約するために地元の大学を選ぶという発想が少なく、競争がさらに激化する。日本でも公務員志向が見られるが、中国のそれはより一層競争的で厳しい環境の中での選択であることを感じた。

万里の長城を訪れた際、その壮大さに圧倒された。この長城は、中華王朝が北方の騎馬民族からの侵入を防ぐために築かれたもので、その建設には多大な労力と時間がかかった。階段を登るだけでも息が切れるこの地に立派な長城を築いた先人たちの苦労を思い、尊敬の念を抱いた。また、このような壮大な建築物を通じて、中華文明の歴史の奥深さとその文化の豊かさを改めて感じた。

中国共産党歴史展覧会を訪れた際には、中国国民の歴史に対する誇りと悔しさが伝わってきた。中国は豊かな歴史と資源を持つ国でありながら、帝国主義の時代には列強によって分割され、幾度となく独立を志しても、自身の利益を優先する者たちによってその努力が阻まれてきた。この歴史的な背景を知ることで、現代の中国社会への理解が深まった。

訪中は、私の視野を大きく広げた。中国は 13 億人以上の人口を持つ多様性に富んだ国であり、その多様な文化や価値観に触れることで、世界の広さと人々の違いを実感した。これまで「中国人」という一括りで考えていたものが、実際には非常に多様な背景を持つ個々の人々であることを理解した。この経験は、自分の文化的な偏見や先入観を取り除き、他者の視点を尊重する姿勢を養うきっかけとなった。

「目で見て学ぶこと、挑戦し続けることの大切さを感じた 7 日間」
2-A　横浜市立大学　左合眞唯

今回の 7 日間の刺激的な訪中を終え、考えたことは主に二つあります。
一つは「インターネットや机上で学んだ社会と自身の目で見たものは必ずしも一致しない」ということです。インターネットには偏った意見も多くみられるがゆえに、憶測が混じった中国に対してネガティブなイメージが日本には存在します。また、これまで中国について学ぶ機会は少なく、領土問題や戦争を通じて学ぶことがほとんどでした。実際に自身の足で中国に赴き、現地の様子や人々に触れることで、ネガティブな側面が注目されがちな日中関係の中にも、互いに思いやる心や互いの文化に対して学びたいという好奇心を持って接することで、より良い関係を築いていける可能性を大きく感じました。
中でも印象的であるのは、北京、西安外国語大学の学生、中国のガイドさんが歓迎して日本人学生を迎え入れてくれたことです。積極的に日本語で話しかけてくれ、キャンパスや観光地を巡る時には中国の生活について沢山教えてくれました。私自身、英語をメインに外国語学習に力を入れてきた経験があるため、外国語を母国語として話す人に話す際は、伝わらない不安感などを抱えながら対峙してくれているということが分かります。そのような状況下で、日本人学生のために観光ガイドなどを行ってくれた学生やガイドの方々を心から尊敬し、感謝します。
もちろん私が今回の訪中で出会った中国の方のような人ばかりでなく、広い中国には様々な方がいます。今回は中国政府の心遣いで発展した街や歴史的な情緒ある土地に訪れ、滞在しましたが、バスからみる中国の景色は「本当に人が住んでいるのか」と思ってしまう建物、地元の人手賑わう市場、毎日の食事を賄うために路上でモノを売る人々など様々でした。この訪中で学んだように、一部の情報ばかりで中国という国を捉えることなく、中国が抱える問題や焦点が当てられていない地域にも目を向け、多面的に理解を深めていきたいと思います。
二つ目は「日中の両方の学生から刺激を受け、私も自身の好奇心に従って主体的に学びたい」と考えたことです。訪中団に参加する日本人学生は、学年、学部、大学関係なく、「自身の目で中国を知りたい」という強い好奇心を持ち、行動力をもつ人ばかりでした。個人的な悩みとして、人目を気にしてしまう私は、「これをしたら周りにどう思われるだろうか」「何かあったらどうしようか」とひるんでしまうことがあります。しかし、この訪中団で出会った仲間の、「知りたい」「経験したい」と思ったことには、とことん貪欲に、海外、学問、言語などあらゆることに挑戦している姿を見て、残りの大学生活に限らず社会人になっても、好奇心を持って挑戦し続ける人間でありたいと思いました。また、学ぶ姿勢に関しては中国の学生が非常に印象的でした。西安外国語大学でペアであった学生は、まだ 2 年しか日本語を勉強していないにも関わらず、複雑な日本語の単語も使って日本語で会話していました。その姿から、どれだけ大学で熱心に勉強しているのかひしひしと伝わってきました。日本の

大学は中国に比べて単位もとりやすく、就職活動も厳しくないがゆえに、中国に比べると大学での学びに対する姿勢が格段に劣っていると感じました。この訪中の中でも、「もっと中国、中国語について学んでいたら」と思う場面は多くありました。今回の訪中を通じて得た刺激や学ぶ意欲を忘れることなく、残りの大学生活、そして社会人生活を充実したものにしていきたいと強く思います。

「自分の目で見て感じることの大切さ」
2-A 名古屋学院大学 佐藤吏菜

文を綴る前に、今回の団員訪中にあたりご尽力下さった日中友好協会、快く歓迎してくださった中日友好協会の皆様、この度は貴重な経験をありがとうございました。ホテルや食事など団員がどうしたら安全に快適に過ごせるかを一番に考えてくださいました。個人でも友達同士でも到底回ることができない充実さであり、北京、西安、上海といった個性ある都市を回れたことは私の一生の思い出になりました。

中国＝悪と考えている人は多いだろうが、私は訪中前から中国に対する印象は良くあった。なぜなら、高校から中国から来た留学生と日頃から触れあっていたことや、観光地で働いている際に中国人と触れ合うとき、いつでも明るく接してくれているからだ。理由はそれだけか？と言われたらそれまでだが、実際に触れ合い関わっていたことで胸を張って言えた。政治は政治であり、人、個人で見たときは別だと考えていたためだ。しかしながら日本人の中国に対する「悪」の感情が強いことに気づいたのは、実際に訪中することを周りに報告したときだ。私はこの目で中国を感じたいと幼い時から思っており、実際に訪中団に選抜された時は心から喜ばしかった。しかしマイナスな意見ばかりで、私のことを敬遠する人もいた。私は自分の思いと一緒に、この人たちにも実際のこの目で見た中国を伝えようという心の下、中国へ向かった。簡潔から言うと、北京、西安、上海、どの地域の中国での滞在も現地の人々は親切に、私たち訪中客を快く案内してくださった。今回の訪中団で一番直に中国人と触れ合ったであろう、北京外国語大学と西安外国語大学との交流では、私たち団員を快く出迎えてくれ、感無量であった。特に西安外国語大学での、学生一人一人がパートナーとなる日本人学生の名前をデコレーションし、笑顔で掲げているところを見た時は目に熱いものがあった。外大生達は、口を揃えて「日本語をこうして日本人と交流できて嬉しい」と言ってくれ、かつて留学をしていたき日本の地域や暮らし、食べ物について穏やかに話してくれた。私が育った日本ではあるが、知らないもの知らないことがたくさんあったし、視点が違う各々の人間だからこそ会話してみて気づいたこともたくさんあった。大好きな日本だからこそ、たくさん国がある中で大学の専攻で日本文化について専攻してくれたことはとても嬉しかったし、熱心に勉強をする姿を見て感銘を受けた。この交流は、私のこの冬に計画している中国留学について後押しをしてくれたし、元気づけられた会となった。
視点を変えて、中国の発展について。中国という国が世界にどれだけ影響を与えているかは日頃のニュースで見てわかる。私は YouTube や tiktok といった動画アプリを見ている際に、中国のスケールさをいかに表している、高いビルや煌びやかな建造物、又、wechatpay や Alipay といったキャッシュレス化が進んでいる光景を何度が見たことがあった。実際に訪れてみると北京、西安、上海各々について大きな特徴があった。北京は歴史的な建造物がたくさんありつつも、その中にスケールのある煌びやかな建物が少しずつ建ってるように

見えた。西安は特に「中国」を感じられた都市であった。兵馬俑を筆頭に古代からの建造物が並んでおり、かつその反面、広大な土地が工事中で、開発途中なところに印象を受けた。これからたくさんの建物が並ぶのであろうか、楽しみが止まらなかった。上海は予想通り、圧倒的煌びやかな都市であった。外灘からみた目が痛いほどキラキラしている上海の光景は未だ忘れられない。またヨーロッパ様式の建造物がズラーっと並んでいたところも印象が強かった。キャッシュレスに関してはどこもかしこも alipay や wechatpay が主流だったことは驚きであったが、一番驚いたところは西安の地下鉄を通った時である。地下を通る客におじさんおばさんがさマグネットや自作のブレスレットを売っていたのだ
が、そこでもキャッシュレス決済ができるようバーコードを持ち歩いていた。日本では見ない光景であるし、お隣のカード決済大国である韓国の屋台でも流石に現金のみであり見たことはなかった。みんなどこでもバーコードを持ち歩いているし、「そんな簡単に誰でもバーコードを取得して売買できるなんて便利だな？私もこんな簡単に商売がしたい」と思った所存であった。

「東洋的文化、価値観の再認識と、対立化するグローバルリズムに対するアプローチについて」
2-A　東北大学　鈴木智也

今回私は初めて中国に訪問した。もっと言うと、私が東アジア系の国とこれほど長く対峙するのは初めてである。
私は 1 年前まで海外に出た経験がなく、昨年の 8 月から初めて 1 年間アメリカにて留学を行っていた。アメリカは、新自由主義、民主主義、資本主義の国であり、すべてが実力とそれに対する利益によって評価される社会である。そのため、世界を社会と個人とで切り離し個人がどれだけ世界の中で成功するかによって評価される。それが目的化されている社会を 1 年間目の当たりにしてきた。具体的には、アメリカ学生の将来の目標はおしなべて将来の年収地位である。そこには自分のビジョンや夢を実現させよ、またはいかにソーシャルグッドなインパクト起こそうかと言うような思考はあまりないように感じていた。

そういった価値によって、世界の中心たるアメリカが存在感を発揮し、イノベーションや新価値創出が行われてきた事は言うまでもない。しかし一方で、そういったことによる実力主義や成功主義の裏返しとなる脅迫観念など、様々な個人的問題を抱えている人々がウェルビーイングに生きられない社会であることは言うまでもない。そんな私は一方で、そういった個人について、意識的な価値観に染まりつつあり、記憶した後、半ば東洋的な、そして儒教的な価値観の社会にいわば忌避感を抱いていた。特に中国はメディアの偏向報道もあり、人権侵害や海洋進出、そしてなんといっても共産主義的な自由主義との軋轢などなどの印象によって、非常に自分にとって縁遠いものではあった。

そんな私が今回訪中して何よりまず思った事は、ご縁と恩による社会の新しいエコシステムの可能性である。今回の訪中団は非常に豪華で過密な濃度の高いスケジュールであった。私はスポンサーである中国政府はもとより、何よりもまず今回の訪中を企画し、1 週間 1 人も取り残すことなく、日本に連れて帰った日中友好協会の方々、川津会長、そして私の班の引率であった吉澤さんに非常に感謝の念を覚えた。何故かと言うと、このようなギブの精神、誰かに何か与えると言う見返りを求めない精神はアメリカの社会ではあまり見られない光景だったためである。もちろんアメリカでも寄付をする文化は大学や孤児院などにあったが、こういった身近な人に対して、見返りを求めずに何かを施す与えてあげると言う小さな個人個人の間での無償の親切は全くほど私は感じられず、そこに非常に新しさを感じた。

今回の訪中が私の将来にどれだけ影響するかは正直まだ未知数である。しかし私がグローバルな人材として、世界の半導体業界のサプライチェーンを担う人材として活躍するためには、今世界を席巻している米中対立を必ずどこかで乗り越えなければならず、それに向け

て自分がまず中国と言う自分が忌避感を持っていた国に対して 1 つ接点を持ったと言う事は非常に非常に大きな将来への財産であると確信している。もちろんアメリカ、中国一様に様々な問題があり、それを乗り越えられるハブとなるのは日本しかない厳しい状況であるが、今後どのような障害があるかわからないものの精一杯両国の関係改善のためにアプローチしていきたいと思っている。
最後に中日友好協会、そして今回参加した総勢 100 名の訪中団の皆様に非常に厚くお礼を申し上げて感想文を終わります。

「外国語大学での交流で感じた常識の違い」
2-A　明治学院大学　瀬川 祐毅

「台湾は中国の一部ではないのですか？」北京外国語大学の学生と交流した際、私はこのようなことを言われました。これは北京外国語大学生が私に「中国はこれまでに訪れたことがありますか？」と聞いてくれた際、私が「没有。但我去过台湾。」と答えたためです。私は台湾を中国とは別の国だと思っていましたが、彼は台湾を中国の一部、日本で言う都道府県のひとつくらいに思っていたため認識にずれが生じていました。
日中における報道や教育の違いによって当たり前だと思っていたことが違うという事実を身近な会話から実感するとともに、このようにお互いにお互いの常識を知ることがこれからも日中関係をより良くしていくためには必要だと思いました。
今回のことはお互いに悪意があったわけでは全くありませんが、今二国間で起きている問題に対しても同様で、中国での報道の仕方、教育現場で教わったことなど現地の人の声を聞くことが問題理解に対して重要であると考えました。重要であるとは、自分事として考えられる、つまり身近な問題として考えられるという意味です。

文化や経験が違う中国人の人々とうまく付き合っていく上で大事だと感じた点が、やはり積極的に中国の文化、特に言語を自ら理解していく必要性です。今回の訪中で中国側の方々はとても友好的で私たちに対して素晴らしい歓迎をしてくれましたが、冒頭でも述べたように議論や談笑の中でコミュニケーションがうまくいかなかった部分があったことも事実です。私はその対策として「相手の声を聞くこと」を挙げましたが、翻訳した言葉を聞くのと話者の言語を直接聞くのではやはり違うと思います。そこで、相手の言語（ここでは中国語）を習得して使えるようになることは大切だと感じました。

私は今回の訪中の前より中国語を勉強していましたが、今回北京外国語大学や西安外国語大学の学生、送迎を担当していただいたバスの運転手の方やホテルのスタッフの方々と中国語を使ってコミュニケーションをする際、自信を持てた部分とまだまだ向上の余地がある部分を発見しました。発音・発言力に対しては褒めてもらうことがありましたが、聞き取りや本格的な会話には課題が残りました。コミュニケーション・相互理解、中国語を相手の価値観や常識を聞くための手段として用いる場合、教科書に載っているしっかりとした中国語はもちろんですが、現地の人が日常的に使う話し言葉なども積極的に勉強していかなければいけないと感じました。バスで教えてもらった西安の方言「嘹咋咧（いいねの意味）」は今も覚えています。訪中団の経験をモチベーションに変え、実践的な中国語の能力を今後も高めていきます。

日本の他大学の学生との交流も非常に刺激的になりましたが、中国の学生ともしっかりし

た議論ができるレベルまで語学力とともに成長していきたいです。中国語を通じてこれからも中国文化に触れることは多いと思うので、ぜひ今回学んだ「中国と日本では常識の違いが存在する」ということを胸に刻み日々過ごしていきます。

「訪中団を経て」
2-A　慶應義塾大学　高梨結衣

私が今回訪中団に参加したのは、身近な隣国でありながら社会の文化も制度も異なる中国のことを、実際に自分の目で見て肌で感じたいと思ったからです。人生で初めての訪中を終えて振り返ると、この当初の目的は十分に果たせたように思います。滞在中は見るものすべてが新鮮で、訪れた場所や出会った人々にたくさんの刺激を受けました。今回は三つの観点から訪中団を通じて印象的だったことを振り返ろうと思います。
まず一つ目は、中国の歴史的な遺産の壮大さです。様々な場所を訪問させていただきましたが、特に印象に残ったのは万里の長城です。万里の長城は長年にわたり整備・修復されていますが、その基礎ができたのは紀元前だと伺いました。それほど昔に 6000km 以上の長城を築くことを可能にした、秦の始皇帝の権威、そして指導力には驚かされます。今回訪れて実際に登ってみましたが、斜面はかなり急で階段を上がるだけでもすぐに息が上がって汗だくになりました。二千年以上前、石を運ぶ重機もない時代にあれを作り上げたという事実が信じられません。
二つ目は、中国の改革と発展の歴史です。今回訪れたどの都市でもバスの車窓から外を眺めていると様々な風景を見ることができました。まず目についたのは、数多くの高層ビルです。日本でもあまり見ないほどの高さのビルやマンションが何十と立ち並んでいました。加えて、なにより印象的だったのがそのデザインです。特に西安で見た高層ビル群は大半が全く同じデザインのものであり、そのままコピーペーストしたかのようにそれらが何十と並ぶ光景は壮観でした。西安といえば伝統的な都といったイメージが強いですが、一方では急速かつ大規模な発展がなされているのだろうと感じられ、旅の中で印象に残る瞬間となりました。
三つめは中国の人々のエネルギーです。今回の訪中では人々のエネルギーを実感する瞬間が多くありました。例えば国内観光客の多さです。今回訪れたいわゆる観光地には、多くの中国人観光客の方がいらっしゃいました。例えば兵馬俑は前にも後ろにも進めないほどの人ごみで、中国語が飛び交う中で汗だくになりながら見学しました。もちろん兵馬俑が偉大な史跡であるのは前提として、中国国内からもこれだけの人が見学に訪れているということに中国の活気を感じました。そしてこのような活気は他にもいたるところで見られました。中心部の屋台もですし、バス移動中に見掛けた様々な場所で開催されている集団でのダンスなど、日本にはない種のエネルギーであったように思います。
最後に、今回の訪中は中国滞在中に蘇州で日本人学校のバス襲撃事件もあり、非常にセンシティブな時期だったと思いますが、日中友好協会、そして中日友好協会の方々のご配慮ご尽力のおかげで、私自身非常に貴重で有意義な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。訪中前は中国についてほとんど何も知りませんでしたが、訪中団を経て様々なことを知ることができたし、何よりこれからより一層知りたいと思うようになりま

した。今後、何らかの形で少しでも日中友好に寄与できることを願っています。

「感じて、考えて、理解する」
2-A　鳥取大学　高橋唯人

今回の訪中ではとても貴重な経験を積むことができました。その中でも特に印象に残っているもの、そして学びが多かったものは「コミュニケーション」と「誕生日」、そして「実際に目にした景色」です。
「コミュニケーション」としては、西安外国語大学で交流した現地の学生さんとお互い四苦八苦しながらなんとかしてコミュニケーションをしていこうと努力したのがとても貴重な経験になったと思います。このような経験をすることで言語を習得するモチベーションにつながることや言語が通じない時の相互理解の難しさを痛感することができました。
「誕生日」としてはとても個人的なイベントとなるのですが、訪中日程中での誕生日が貴重な経験です。例えば、保安検査での顔認証の時に誕生日当日だと「happy birthday to you!」の文字が表記されたことや最後の晩餐でのサプライズは決して忘れられない貴重な思い出となりました。前者はたまたま得られた知見ですが、これもただ呆然と時間を過ごしていたら十分に見逃しうると思います。このような貴重なチャンスも受容する準備が整っている人にのみ受容することができると思え、今後繰り返していく毎日の中でもチャンスを受容する姿勢を忘れないようにしたいと思いました。
「実際に目にした景色」としては今回訪れた観光地などに限らず、今回訪れた北京、西安、上海のそれぞれの車窓から見た景色から多くの違和感を感じ取り、考えたという経験です。５感を使って感じて、頭でよく考え、物事に対する理解を深める。これが今回の訪中での自分の目標でした。例えば何気ない街の一つの景色から博物館の一つの展示品まで、多くの気づきや違和感達から中国に対する理解を深めることができました。例えば、市街地における道路のために使用する土地の観点で日本と中国を比較すると「日本の抗遅く道路は高架が多いのに対し、中国では地上を走行することが多いこと」などの差が見つかり、とても興味深く感じました。

私は日本人として今後相互理解の難しさを理解した上で相互理解を進めていきたいと思いました。私は中国と日本の相互理解に限らず、相互理解の難しさについて訪中前から訪中時にかけて考えることが多くありました。その結果、自分が知ったつもりになっていたような物事が相手に対する理解の障壁となっていたのだなと感じました。実際に、最後の晩餐での団長がスピーチ内でおっしゃっていたようにネットや新聞などのメディア達から得られた情報の蓄積から形成されたイメージは今回の訪中の中で見えている実際の景色とは大きく違いました。このように相手のことを理解したという誤解から相手の実際の姿が見えなくなってしまう状態が相互理解を阻害するため、実際に感じて、考え、理解を深めないと深い相互理解は難しいようにも感じました。このようなことからも、今回の訪中団で実際に現地を訪れ、交流などの実際に体験することの大切さを痛感しました。そのため、これからある

特定の側面が強く映し出されている可能性を考慮しながらメディアの情報に触れていきたいと思います。

「訪中をきっかけに。」
2-A　大阪大学　　西野海里

渡航前のイメージとその変化について、個人的には、中国に渡航するのは初めてだったので、どうしても PM2.5、監視社会、テクノロジーの普及のイメージがかなり強かったです。どちらかといえば少し悪い印象を持っていたのは事実です。
訪れてみて思ったのは、空気については西安が乾燥しているな、と感じるくらいで、呼吸器系の弱い自分でしたが、あまり感じることがなかったです。上海で街がかすんで見えていたので、決して綺麗というわけではなさそうでした。道路などに設置されているカメラかなりの台数があって、特に大都市ではそう言った体制がかなり強く敷かれているように感じました。また、北京の大通りでは警察車両が止まっている印象があり、日本とはまた違った空気感でした。また空港、地下鉄などのセキュリティも強く、身体検査などが厳しかったり、手荷物についてもかなり厳しかったりと、管理が徹底されていました。
国家間の関係について今回の訪中を通して思ったことは、国際情勢の中で、報道では中国は南沙諸島を含めた領土問題、アフリカ諸国に対して出資することで、借金漬けにしているなどと報じられることが多いですが、僕自身は訪れてみて、客観的にみて判断したい し、最後に自分の考えを決めるのは誰かでなく自分であるべきと感じるようになりました。自分で足を運んで、自分で感じることを大切にしたいです。領土問題を含め、様々な問題がある日中関係、国際関係のなかでも、対話をして、交流をすることは相互にとって、将来への大きな投資になると考えていて、今後も交流事業を含めて、自分が参加できることは続けていきたいと思います。
学生交流として、今回のプログラムでは北京外国語大学、西安外国語大学の 2 大学を訪問させて頂きました。学生と交流するなかで、結婚や出産に関する価値観、大学制度、就職制度の違いなど、隣国であっても、全く異なる文化であると感じました。結婚や出産については、キャリアを考えて控える傾向にあるのは日本と同じで、中国も将来的には少子高齢化に陥るのではないかと予想していました。あとは寮生活が中国では普通であり、汚い寮に複数人で暮らすスタイルも日本とは大きく異なり、生活面でも日中の違いがあることを知ることができました。
交流のなかで、一つ大きな後悔があり、それは中国語とか中国史をもっと勉強すればよかったということです。現地の学生は、日本を知ろうとしてくれて、日本と友好な関係を築こうと考えてくれている学生が数多くいて、自分ももっと中国のことを知るべきだし、知ろうとすべきだと感じるようになりました。
また、文化理解はその土地を訪れることによって達成される部分が大きくあると感じました。中国で感じたことの一つとして、中国は交渉の文化があって、店で何かものを頼むときなどは交渉をするのが当たり前で、そこで初めて日本で値切りをしようとする中国の方がいることが違和感なく理解できました。これは完全な文化の違いで、もちろん良し悪しがあ

るわけでもないです。行かないと気づけないことはたくさんあります。
今回のご縁を大切に日中の学生同士の交流活動を続けられたらと思っており、継続的な文化交流が今後の日中関係を作り上げていくと信じています。現状のように国家同士の関係が決して良いとは言えない状況であっても、学生同士、市民同士のつながりだけでも良い状態でつなぐことができれば将来的にはより良い関係になれるのではないかと思います。先ほども述べた、現地の学生の日本に対する関心が個人的には一番刺激を感じる部分でした。僕は外大生でもなければ、中国語を第 2 外国語にしているわけでもないので、行ってみて知るきっかけにしようと思っていました。自分の未熟さを思い知るとともに、世界のグローバル化の流れで、受動的に知るのではなくて、知ろうとする姿勢がいかに重要かということを改めて再認識しました。
今回の日中交流はあくまできっかけであって、これがゴールではないと思っています。今後、日中の協力関係をずっと続けていくためには、継続的な交流や、個々が訪中の中で学んだことを自分の中でかみ砕き、この経験を伝えていき、協力の輪を広げていくことが今回派遣していただいた我々団員の役目であると考えます。

「訪中前と後での私の変化」
2-A 広島大学　早見光海

訪中前の自分は、少なくとも、中国にあまり良い印象を持っていませんでした。なぜなら、中国には共産党や社会主義などといったどこか分からなくて怖いイメージや、コロナウイルス発祥の地であるイメージが私の中で根付いていたからです。また、反日デモなどの映像をテレビで見て、中国人自体が、日本人のことが嫌いであるという印象も強かったことも理由です。
私の周囲の人間も、私と同様に中国に積極的にかかわろうとはしていませんでした。特に私の両親は中国に悪い印象を持っており、日本いる中国人は危険で日本に害をなす存在だから、排除するべきだという考えでした。しかし、私は、私が持っている、中国人に対する周囲の人々やメディアによって形成された印象が正しいのかどうかわからなかったし、もしかしたらとんでもない差別意識が印象操作によって育まれているのではないかと考えていました。実際に大学等で中国人と交流してみると、みんな思慮深くいい人ばかりで、多くの日本人が中国人に対して持っているような、傲慢で礼儀知らずなイメージとは合致しませんでした。
上記の日本人が持っている、中国に対する印象への違和感を払拭するため、私は私の経歴に特別中国との繋がりを持っているわけではなく、中国語も話せなかったにも関わらず、訪中団に応募することを決めました。正直なところ、大学を出てからは訪れる機会がなさそうな中国に人生で一度行ってみたいといった軽い動機もありました。しかし、一番の志望動機は、メディアや人の噂ではなく、自分の目を通して中国を見ることによって中国への偏見をできるだけ取り払った状態で、日本と中国のつながりについて、もう一度考え直したかったことです。
実際に訪れた中国は、様々なもののスケールが日本より大きく、壮大な印象を受けました。特に万里の長城や上海の規模には圧倒されました。その壮大や印象は、中国の途方もなく長い歴史に裏打ちされているものだと感じました。また、一週間しか訪れていないにもかかわらず、中国人といっても、様々な人々がいることがわかりました。特に北京外国語大学や西安外国語大学では行き交う学生たちを観察していましたが、行き交う人々の見た目やその表情も本当に様々で、私の中の、統一的だった中国への印象が変わっていくのを感じました。
西安外国語大学での交流も、私の訪中の中では大きなイベントでした。西安外国語大学で私のペアだった中国人の女の子は、笑顔が可愛いくお世話焼きで、とてもいい人であったことが印象深かったです。彼女は少数民族で、西安外国語大学には少数民族は多いと言っていました。日本より多様な人が中国にいると感じたのは、きっと背景に民族の多様性があることも関係しているのだと思います。
訪中を終えた私の一番の成果は、中国人がどのように生活を営んでいるのかということを

実際に自分の目で見て、中国に対する形のない不安を払しょくできたことです。これから中国との関係は日本にとってさらに重要になっていくので、今回訪中したことで得た生の経験を生かして、中国とのかかわり方を、周りに流されて偏見を持つことなく、主体的に考えていきたいです。

「両国の国民性と今後日中友好を築くために」
2-A 京都外国語大学　藤田那菜

私が今回の訪中団に参加し、気づき考えた点が２点あります。
今まで私の中国の印象についての変化は以前中国へ訪れた際に世界の公用語である英語が全く伝わらなかったこと、現地の人のマナーが日本と大きく違っておりあまり良い印象を持たずに帰国しました。お店でのお会計に順番を並ばないことやどこであっても大きな声で話をしていたり、外国人が英語を使って話をすると頭をかしげて無視された経験から中国と日本の関係は良くなることは個人的にないなと考えていました。しかし、英語圏への留学で中国人と関わりすごく日本に対して興味を持って日本人に対しとてもやさしく接してくれる姿を見て疑問を抱きました。今回訪中団に参加し、日中友好協会というものがあり中国政府からの招待での訪中は私の中国への疑問を明らかにできるのではないかと期待も込めて参加しました。実際参加してみて現地の協会の方が様々な準備やサポートを私たち日本人学生にして頂きました。中国でのスケジュールの中で本当にあたたかく歓迎し、私たちのためにとても動いていただいていることが感じられました。大学生・大学院生との交流の場でも日本についてとても興味を持っており、とても一生懸命日本語や日本文化について勉強していることに日中の友好を感じました。今回の訪中では日本語学科や日本に興味のある学生との交流でしたが一般の学生は日本に対しどのような印象を抱いているのか知りたいと思うきっかけにもなりました。
そして今回の訪中団の同班に中国語が話せる学生がいました。レストランや街中で歩いている中国人、お店の人と同班の友人が中国語で話しているのを見ると以前私が中国に旅行に来た時と対応が大きく違うなと個人的に感じました。料理やドリンクもなくなったり、追加でお皿を持ってきてくれたり、夜のこの場所は危ないから別の入り口まで回った方がいいよなどとても親切に声をかけてくれました。私は以前言語に壁があったこともあり全く歓迎されているとは思いませんでしたが、言語の壁がなければ今まで感じてきた中国人の国民性とは違っているのかもしれないと感じました。英語が通じないという点では日中の交流はまだ難しい部分は多々ありますが、現在では日本・中国ともに外国語教育に力を入れており現在の若者が交流の機会を持つことで両国にある嫌悪感や良くないイメージが少しでも払拭するのではないかと考えました。隣国であり共に切っても切れない関係である日中が若者の力で関係が変化していく未来があると感じました。そして今回貴重な訪中団に参加できたことでその若者が作れる日中関係に少しでも力になりたいと思いました。
次に、日本とは違った文化や社会の側面を感じられた点です。大学生との交流では中国では人口が多いため就職率は半分以下、就職できても３５歳を過ぎると解雇の可能性もあるため学生時代には勉強に熱を注いでいると聞き驚きました。図書館の自習室では本や教科書が山積みになっており中高の生徒は週に６回夜まで勉強に励んでいるなど日本はスポーツなどにも力を入れる一方で中国は勉強に尽力を注いでいることがわかりました。それでも

優秀な生徒が就職難で浮浪者も多いと聞き社会の違いを感じました。パフォーマンスの際でも中国から昔入ってきた文化でも日本と中国では違っていると感じ中国の有名な音楽も日本とは協調が全く違ったりなど両国の文化や社会の違いを学べる良い機会にもなったと感じました。
日本の経済面でも中国と良い関係を築くことでさらに発展していくことが予想されますし、人口の多く優秀な中国人と人口が少なくまじめな日本人とが異なる文化や社会などを融合していくことでより発展した社会を両国ともに作り上げることが期待できるのではないかと考えます。それには若者の力が必要不可欠であり日中友好をさらに深い関係にしていくことが今後大切です。まだまだ日中友好への道のりは長くとても大変で難しいことではありますが、今回の訪中で学んだこと、感じたことを無駄にせず良い関係へと導けるよう行動することが今回出会った両国の若者にできることだと感じます。

「出会いで君は、できる。」
2-A 京都芸術大学 前田美月

今回の訪中で五感を使って得た経験の数々は、私の人生において、とても大きな学びとなりました。その中でも、具体的に中国での社会情勢を感じることが出来た経験が、２つあります。
1 つめは、今回の旅のプログラムで連れて行って頂いた、共産党記念館での学びです。ガイドさんの説明を日本語に訳して頂くことで、より深いところまで知ることができ、政治色の強さを感じることができました。また、私たちの他にも多くの観光客が訪れており、政治に関心を示している人が多いことに驚きました。日本側の視点で学ぶのではなく、中国側の視点に立ち学ぶ事は、現地に行ったからこそできる良い経験であったと思います。
２つめは、旅の最中にホテルから“代行サービス”を利用した時のことです。店舗で買い物をした際に求めていた商品が無かった為、代行サービスに代わりに店舗を周って頂いたり、ホテルからある場所への荷物の配送なども、代行サービスにてお願いしました。タクシーで往復 2 時間かかる距離を、300 円～400 円ほどで代行して頂くことができ、利用者側の手軽さに驚いたのと同時に、労働者側の仕事に見合っているのかと考えさせられました。日本でも食品の配達サービスなどはありますが、なんでもお願いできる代行サービスというのはあまり普及していない為、お金を持つ者と持たぬ者の差が激しいからこそ成り立つサービスなのではないかと感じました。私は旅行者であるが故に、このサービスをとても便利だと感じましたが、現地の人々の何%が利用しているのかは、貧富の差に繋がってくるのだと思います。私は将来、自身が得意とするコスプレをビジネスにしたいと考えている為、このサービスはとても重要な鍵になると思いました。

日中友好協会が企画してくださったプログラムから感じた中国、自身が中国国内で行動したからこそ感じた中国、どちらもとてもリアリティがあり、現地に行ったからこそ実感のできるよい体験であったと思います。そして、日中友好協会大学生訪中団という団体で参加したからこそ、より深い学びを得ることが出来たのではないかと感じています。それぞれ異なる目的、目標を持った学生が集まることで、様々な視点から見た中国を、互いにシェアし合うことが出来ました。
川津団長の「出会いで君は、変わる。出会いで君は、できる。」というお言葉がありましたが、私自身も団員の仲間達のお陰で、更に視野を広げることができたので、日中友好協会や、団員の仲間達との出会いに感謝すべき旅でもありました。素晴らしい学歴を持った友人達と出会い、美大生という肩書を持つ私は、学の足りなさを感じる場面も沢山ありました。一方で、友人達の言葉で、私だけが持つ個性や強みを再認識することも出来ました。日中友好協会大学生訪中団に参加した事は、中国の言語や文化を学ぶだけでなく、自分自身を知る良

いきっかけにもなったのではないかと感じています。今後もここで出会った友人達を大切にし、お互いが高め合えるような素敵な関係性でいられるように、努力を怠らないことを大切にしていこうと思います。

「中国で見たもの」
2-A　金沢大学　松久保弥亜

私は、中国と日本のハーフで、幼少期から頻繁に中国に行ったり、小中の九年間を中学校で過ごしたりなど、中国が馴染みのある国でした。
日本と中国の両国は古来よりともに助け合い、学び合っていたにもかかわらず、近代以降では対立し戦争が勃発したという不幸な歴史が存在しています。またいまだに国家間、市民間での対立が起こっているのも現実です。そのような背景のもと、日本人は中国人を嫌い、中国人は日本人を嫌ってしまう負のサイクルが起こってしまっています。しかし、実際に中国に行ってみると、日本人の想像する中国人はごく少数で、ほとんどの中国人が温かい人々なのです。これは、今回の訪中団に参加して感じたことであると同時に、幼少期からの経験からも確信できたことです。
今回、隣国でありながらなかなか友好的になれずたびたび緊張してしまう中国に実際に赴くことで得られたことがたくさんあります。たとえば、北京外国語大学や西安外国語大学の学生と交流したとき、私は感動しました。SNS が発達している今日では事実が歪曲されたたくさんの情報が溢れており、政治を絡めた動画では反日、反中のコメントもたくさん見かけるため、SNS に触れる時間が比較的多い私たちの世代ではいわゆる反日の人が多いのではないかと不安に感じていました。実際、日本にいる学生の中には中国をあまりよく思っていない人が少なくなく、第二外国語で中国語を選択していても、中国に対する意欲関心があまりない場合も少なくないように見受けられます。しかし実際に交流した中国の学生は日本に対してとても好意的で、意欲的に日本語や日本文化、日本史を勉強していました。また、今回の交流をとても意味のあるものだととらえており、準備からとても真剣に時間をかけて取り組んだと話してくれました。同世代の方々と交流し、リアルな意見を聞くことができて、私にとっても有意義な時間になりました。ほかにも、日本のニュースなどからたびたび取り上げられる中国に対するイメージとして、「汚い」などがありますが、実際に行ってみると道や公園にはゴミ箱がたくさんあり、ポイ捨てがなくとても清潔だと感じました。「百聞は一見に如かず」という言葉があるように、不透明や未知の領域である物事には、自分の目で確かめることが大切だと改めて認識させられる出来事が多かったです。異文化交流に留まらず、西安の兵馬俑を見、万里の長城に登ったことは、机上で学び、教科書でしか見たことのなかったものを実際に自分の身で体験できたのでとても感慨深いものでした。
一週間という短い時間の中では、濃い時間を過ごすのに限界があり、まだまだ見たいもの、体験したいことが自分の中ではたくさんあります。私は今回の訪中団を通して、中国についての興味関心が一層高まり、もっと関わりを持ちたいと思うようになりました。

「日中ハーフである私にしかできないこと」「中国語が話せるバイリンガルである私にしかできないこと」は何か。そして私自身が日中友好の架け橋となって努めていきたいとより強

く思いました。そのためにも中国に留学したいと真剣に検討していきたいと考えています。

「自分の原点へ」
2-A 東京外国語大学 村田夏紀

北京空港に降り立った時、口に出すことこそしなかったけれど、感動で胸が震えた。ここは2 年前、私が来るはずだった場所だ。
高校時代に行った上海旅行で中国に魅せられ、大学に入ってから中国語を学んで 3 年。当時の私は、留学することを夢見てがむしゃらに頑張っていた。学校での成績、アプリを使った会話練習、HSK。すべて北京の大学に留学するためだったといっても過言ではない。その自分の大きな目標がコロナウイルスの流行によって音を立てて崩れ、私の頭の中は文字通り真っ白になった。両親は「社会人になってからでも、中国旅行ならいつでも行ける」とフォローにならないフォローをしてくれたものの、私が経験したかったのは単なる有名観光地巡りではなかった。現地の人びとの生活、学生との交流、メディアを通してではわからない空気感。旅行では到底かなわない、「新鮮な中国」「丸裸の中国」を学生の今だからこそまっすぐ見つめ、そして自分なりに咀嚼したかったのだ。
そんな私にとって、今回の訪中団はまさに「留学生活を超濃厚圧縮したような旅」であった。数々のプログラムのうち、やはり印象的だったのは大学生との交流だ。北京外国語大学の学生さんたちは日本語を私たち母語話者と同じように巧みに操り、私たちと話すうえでコミュニケーションの障壁をまったく感じさせなかった。というよりむしろ、私がいろいろと教えられてしまった。仲良くなったある男子学生とテーマである恋愛について議論する中で、私は無神経にも「彼女はいるの？」というような聞き方をしてしまった。彼は笑顔で「彼氏がいるよ」と答えてくれたあとで、同性愛についての彼なりの考え―たとえばパートナーを思う気持ちは変わらないこと、自分は自分らしくいたいことを日本語で優しく話してくれた。また西安外国語大学の交流では、私たちペアはお互いのレベル感が同じだったため、日本語と中国語を半々で使った。学生生活から最近の日中関係を巡る不安定さまで、彼女がごちそうしてくれたタピオカを片手に様々なことについて話し合えた時間が楽しかった。
ほかにも万里の長城や兵馬俑など、これぞ中国という充実したプログラムが目白押しだったが、そうした場所でも私の目を引いたのはやはり中国の人びとの姿だった。かなりラフな格好で街歩きする家族連れ、大声で自分の意見を主張するおばさま方、道に痰を吐いたりお腹を出したりしている「北京ビキニ」のおじちゃん、私たちをしげしげと見、「あの人たちどこから来たの？」なんて言っている子どもたち。中国の人びとがのびのびと、自分に素直に生きているようすを見るのが私はやはり好きだ。時折あまりの異文化にビックリすることも正直あるのだけれど。人々の生き様を見たとき、私はその国の本当の姿を知った気がして、より惹かれていくのだと思う。もちろん人によって価値観はさまざまだし、私自身もまたその一部分しか見えていないのは承知である。少なくとも今回の旅でローカルな暮らし・ローカルな交流があったことで、私は中国に対してまたひとつ親しみを感じ、中国語学習のモチベーションにもつながった。

旅程中、蘇州で日本人親子襲撃事件があったこと、そして昨今の状況を踏まえても、日中関係はスムーズだとは言い難いだろう。たしかに「国」という大きな単位でみれば両者の関係はとかくギクシャクしがちであるが、もっと中身の部分、メディアを通してではない「生」の姿、そして何より一人ひとりに目を向けるべきである。「中国人」「日本人」といういわゆる「大きな主語」でくくるのをやめて、今回訪中団であったような草の根の交流を積み上げたい。私たち若い世代の努力が、未来の日中関係の改善につながればと強く願っているし、自分もその一翼を担いたい。
改めて、今回このような貴重な機会をくださった友好協会の皆さん・お世話になったスタッフの方々に感謝を申し上げるとともに、今回の出会いを大切にし、今後につなげていければと思う。
出会いで君は変わる！出会いで君はできる！ありがとうございました！

『私の中の「中国」は本当の「中国」？』
2-A　東京外国語大学　吉川恵

私は大学で中国語を約３年間勉強してきた。しかし肝心なことに一度も自分が学んでいる言語の本拠地ともいうべき中国本土を訪れたことがない。そこで、中国現地の様子を、身を以て感じたいと思い参加したのが訪中団だった。決して長くはない 7 日間の訪問だったが、私が訪中前までに持っていた中国のイメージを巡り様々な発見があった。
まず、北京に到着するや否や驚いたことがある。それは「意外と空気が綺麗！」ということだった。実は出発前に以前中国を訪れたことのある友人や父から北京の空気が澱んでいた、汚かった、という話を聞いていたため、相当濁った空気がお出迎えしてくれるのだろうと覚悟を決めていた。しかし実際の北京は個人的に空気汚染の「汚」の字もないくらいに綺麗で、晴れの日は空が綺麗な青色だった。むしろ意外だったのは、西安と上海の方が、空気が澱んでいるように感じられたことだった。しかし、泊まった三ヶ所のホテルにはほとんどガスマスクが常備されていたため、これで中国の空気は綺麗と結論づけるのは危険ということだろう。
二つ目に驚いたことは、西安、上海、北京の３都市共に、自転車の利用者がとても多いと いうことだ。その中でも体感として北京が特に多く、道端にレンタルサイクルと思われる黄色と水色の自転車がたくさん並んでいて、老若男女関わらず自転車を元気に漕いでいた。北京の道路は幅が非常に広く、自転車専用レーンも余裕があり、道路設計自体が自転車を漕ぎやすいよう配慮しているようにすら感じられた。以前大学の中国語の教科書に、北京では自転車がないと不便だ、という内容の例文が載っていたが、そのことが証明される形となった。
一方で、私が渡航前に持っていた中国のイメージが一部間違いではないということがわかるような出来事もあった。
特に印象的だったのは、複数回目にした、空港の土産売り場などで、途中で疲れたとでもいうかのように品出し途中の商品のパッケージや段ボールがそのまま通路に置き去りにされている光景だ。また、従業員の様子も日本とはかなり違いがある。円卓で食事をする際に料理の提供やバッシングをしてくれる従業員は、一言、もしくは何も言わずに食事を出したり下げたりする。常に笑顔で、謙って対応してくれる日本の従業員に慣れていると最初はかなりそっけなく感じる。しかし、みんな周りをしっかり見ていて、中国料理に慣れない私たちが食事を取るのに手間取っていたりするとすぐにやってきて、気づくと全員分の器に食事をよそってくれる。ものを落としていると前置なくストレートに「上着が落ちてるよ」と教えてくれる。とにかく手際がいいのである。同じことを日本で行うと、おそらくクレームが出たり問題になったりしかねないが、私にはこの下手に肩肘を張らない、絶妙な「いい加減」ぶりが心地よく感じられたし、少し羨ましいとも思った。
今回の訪中を通じて私が最も強く実感したのは、中国という国を「中国らしい」というたった一つのイメージで括ることなど不可能であるということ、そして、中国という国の中には

自分と同じ、一人一人の人間の等身大の生活が無数に集まっているということだ。これは至極当たり前なことではあるが、ひとまとまりに括られた「中国」や「中国人」を報道する傾向が強い日本のメディアの中で生きてきた私にとって、実際の経験に基づいてこの結論に到達できたことは非常に意義深い、重要なことである。だからこそ、今後の隣国隣人同士として、私と同じ経験をより多くの日本人ができるように、日中交流の活性化はもちろん、国内のメディアが、政治・経済ばかりでなく、中国の人々の生活や文化についてより多く報道するようになっていってほしいと強く思う。また、私自身も、一中国語学習者として、日中関係の明るい未来のために自分に何ができるか、これからも模索していきたい。

「訪中団での経験を通して」
2-A 中央大学　吉田真翔

私は4年前に上海・南京・蘇州を巡る機会を手に入れ、世界遺産や博物館の見学、中国舞踊・中国茶などの中国文化の体験や現地の人々との交流を行いました。この訪中プログラムを通し、自身の中国語の発音の拙さと母国語ではない言語を使いコミュニケーションすることの難しさを実感し、次回訪中する際には円滑なコミュニケーションを行えるようにするために中国語学習を進めてきました。学習する中で「日中友好大学生訪中団」を知り、地元の方々と積極的にコミュニケーションを図り、4 年前のリベンジをすることと同時に、4年前と比べた街の変化や中国の発展の様子を自ら目に焼き付けることを目的として参加を決めました。
今回の訪中団では万里の長城・兵馬俑・故宮といった世界遺産や外灘などの現代的な摩天楼を見学しただけでなく、北京外国語大学や西安外国語大学の学生との交流を行いました。世界遺産の見学では中国 4000 年の歴史の雄大さに心を打たれ、外灘では 4 年前の姿と比較し、現在の発展した上海の姿を自らの目に焼き付けることが出来ました。訪中団では様々な経験をしましたが、最も印象に残っているプログラムは西安外国語大学の学生との交流です。交流会は現地学生と一対一のペアを組み、現地学生がキャンパス内を案内するものでした。キャンパスツアーを通し、現地学生の大学生活に対しての理解を深めることができただけでなく、文化交流の重要性を改めて実感することができました。また、バディを組んだ学生とのコミュニケーションも円滑に行うことができ、日々の学習の成果を示すことが出来ました。
訪中団を通じて文化交流の重要性を知りましたが、現在の日中関係は様々な問題を抱え、必ずしも良好とは言えません。しかし、中国は広大な領土と世界最大の人口を有する日本の隣国であり、過去 30 年間で中国経済は驚くほど急速に発展し、現在は世界第 2 位の経済大国となっています。そのため、中国は日本にとって最も重要な隣国の一つであり、中国と日本の関係をさらに改善することは、世界平和への道を開くものであると確信しています。日中両国は古くは遣隋使や遣唐使を通じて文化と知識を交換し合ったように、現代において も文化交流を通じて相互理解を深めることが重要であると考えております。国家間の関係性が良好ではない状況でも一般人の文化交流は今後も加速させていくべきであり、このような市民間の交流が最終的には国家間の関係改善への大きな力になると確信しております。
今回の訪中団では現地の方との円滑なコミュニケーションを取ることができ、4年前のリベンジを果たすことが出来ました。1週間を通じ、文化交流や相互理解の重要性を再認識したことから、大学卒業後も中国語の能力や今回の訪中団での経験を活かして中国との文化交流事業に積極的に参加し、日中両国の関係改善に微力ながら貢献したいと考えております。